

一開催にあたって一

「米どころ」と言われ、良質な米を生産している山形県が、どのようにして稲作を始め現在の姿になったのか。2千年もの長きにわたって埋もれていた「米作り物語」を水田や住まい、土器、農具などの出土品を通して振り返り、「米どころ山形」の原点をご紹介します。

■展示構成

1. プロローグ 米づくりの始まり

弥生時代初頭に、米をたずさえた人々が日本海を北上し米づくりをもたらしました。県内でも数少ない弥生時代の遺跡「生石2遺跡(酒田市)」の資料を中心に弥生人の足跡を辿ります。

2. みのりを求めて

近年の発掘調査事例から米づくりをしていたムラの様子がわかってきました。より良い実りを求めて山形にたどり着いた人々の生活の様子を出土品と共に紹介します。

3. 鍬・鋤・祀り

古墳時代の低湿地遺跡から鍬や鋤などの木製品が大量に発見されました。これら、米づくりの道具や稲作に関わる祀りの道具から、ムラをあげて米づくりが行なわれたことが窺われます。

4. 国家管理の農業へ

水稲耕作が広がるに連れ、人々の生活も大きく変わっていきました。水田を作るための灌漑や排水には大がかりな土木作業が必要となったからです。事業を指導した有力者は、やがて人々を支配するようになり、各地に「クニ」と呼ばれる小国が形成されていきました。

また、律令制が敷かれ、水田の収穫に応じて上田・中田・下田・下下田と等級が付けられ、水田ごとの作付けも国家が管理するようになりました。遊佐町の上高田遺跡からは「畔越(あぜこし)」と書かれた木簡(木の札)が発見され、律令時代の農業事情を知る大きな手がかりとなりました。

主な展示資料一覧

生石2遺跡(酒田市)

- ・甕(かめ)
- ・鉢(はち)
- ・高坏(たかつき)
- ・深鉢(ふかばち)
- ・蓋(ふた)
- ・石器

高楯南遺跡(天童市)

- ・壺(つぼ)
- ・甕(かめ)
- ・器台(きだい)
- ・片口台付鉢(かたくちだい つきはち)
- ・装飾器台(そうしよきだい)
- ・管玉製作段階
- ・玉砥石(玉といし)

梅野木前1遺跡(山形市)

- ・器台(きだい)
- ・壺(つぼ)

服部遺跡・藤治屋敷遺跡(山形市)

- ・直柄広鍬(なおえひろくわ)
- ・曲柄又鍬(まがりえまたぐわ)
- ・曲柄(まがりえ)
- ・墾杵(たてぎね)
- ・田下駄(たげた)
- ・鉄斧柄(てっふえ)
- ・梯子(はしご)
- ・織機(おりき)
- ・椅子(いす)
- ・弓(ゆみ)
- ・鍮形(やりがた)

馬洗場B遺跡(山形市)

- ・破鏡(はきょう)
- ・四方転びの箱

上高田遺跡(遊佐町)

- ・木簡(もつかん)

■交通案内

JR山形駅より徒歩15分



※車の場合は霞城公園北門よりお入り下さい。

平成20年度 共同企画展

埋もれていた米ものがたり



馬洗場B遺跡(山形市)古墳時代の土器

2008

12月6日(土) ▶ 12月21日(日)

ギャラリートーク 13時30分～

12月6日(土)、13日(土)、20日(土)
(山形県埋蔵文化財センター職員による解説を行います)

山形県立博物館

〒990-0826 山形県山形市霞城町1-8(霞城公園内)
TEL 023-645-1111 FAX 023-645-1112

(財)山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上市市弁天2-15-1
TEL 023-672-5301 FAX 023-672-5586

おいし

生石2遺跡 (酒田市)

生石2遺跡の前期弥生土器には、三つの系統がモザイクのように混在している特徴が見られます。一つは、東北地方の縄文文化の名残を色濃く残した「亀ヶ岡(かめがおか)系」で鉢に見られます。二つ目は、北九州の稲作文化の影響を強く受けた「遠賀川(おんががわ)系」で壺に見られます。三つ目は、これらの特徴が混じり合った「折衷(せつちゆう)系」で、甕に見られます。縄文文化と弥生文化が巡り会い、とまどいながらも一つになろうとしたことがうかがえます。



遺跡全景



鉢(亀ヶ岡系)



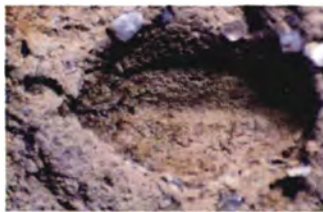
甕(折衷系)



壺(遠賀川系)



生石2遺跡(酒田市)土器群



土器についた籾痕



炭化米(弥生時代)



弥生土器出土状況

はっとり

とうじやしき

服部遺跡・藤治屋敷遺跡 (山形市)



古墳時代の木製品

服部遺跡・藤治屋敷遺跡の河川からは、古墳時代前期の土師器とともに多量の木製品が見つかっています。木製品の主なものは、農具が42点、工具4点、紡織具12点、容器15点、家具2点、作業用具2点、武器具19点、祭祀具6点、楽器1点、建築部材17点、杭材6点、不明品194点です。米作りに伴って、木製品もまた発達していったことがわかります。



発掘作業の様子

赤彩土器

かみたかだ

上高田遺跡 (遊佐町)



種子札木簡「畔越」

この遺跡からは、人形や人面が描かれた土器、呪符木簡など、当時のまじないに関する遺物も多数出土しました。最も注目されたのは「畔越」と書かれた付札木簡です。当初は「畦越」が何を意味するのかよく分りませんが、平川南氏(現・国立歴史民俗博物館館長)が近世初期に成立した農書『清良記』に中稲の品種として「畔越」が挙げられていることに気がつきました。全国各地で出土した類似する付札について

ても調べると、近世の稲の品種名と共通するものが多数確認できました。このことから、「畔越」は稲の品種で、この付札は種籾を保管する際に付けられた種子札であると考えられています。このような種子札は、地方豪族の拠点となっていた官衙遺跡から多く出土することから、地方豪族が種子を管理し、農業指導に当たるなど稲の作付けに強く関与していたことも分かってきました。これらは春に種籾を農民に強制的に貸し与え、収穫時に利子を付けて返納させる、当時の税である「出挙」の実態であると考えられています。

たかだまみなみ

高揃南遺跡 (天童市)



古墳時代の竪穴住居

高揃南遺跡は「県総合交通センター」の建設に伴って行われました。24棟の竪穴住居跡の中で最も大きな住居は、炭が床全面を覆い、梁や垂木といった建築部材の炭化した部分が遺っていました。焼失した家屋と考えられています。